

## 『源氏物語』 柏木事件から見る光源氏

関\* 加恵子

### はじめに

『源氏物語』は、紫式部によって平安時代中期に書かれた、全五十四巻に及ぶ長編物語である。通常、第一巻桐壺巻から第三十三巻藤裏葉巻に至る第一部、第三十四巻若菜上巻から第四十一巻幻巻に至る第二部、第四十二巻匂兵部卿巻から第五十四巻夢浮橋巻に至る第三部の三部構成として理解されている。この論文は、第二部、若菜上巻以降に語られる柏木事件を通して描かれた主人公光源氏の人物形象を扱う。第二部は、第一部に描かれた光源氏の半生を引き継ぎ、照応する形で進んでいくが、この柏木事件も、第一部で最も重要な事柄として語られる、父桐壺帝の妃、藤壺との密通、それにより誕生した男児（冷泉帝）についてを想起させるものである。

若菜上巻は、光源氏の兄、朱雀院の鍾愛の娘、女三の宮の婚選びから始まる。結局、光源氏が、正妻として女三の宮を迎え入れることになるが、婚候補の一人であった柏木は、女三の宮を諦められなかった。柏木は、時の太政大臣（かつての頭中将）の長男である。柏木事件とは、この柏木が、光源氏の正妻女三の宮と通じて男児を誕生させ、自身は逝去する一連の出来事をさす。

光源氏は、大邸宅六条院の主であり、准太上天皇であり、東宮に入内した明石の姫君は男子を出産する、押しも押されぬ理想的な権勢家であった。光源氏は、長男夕霧と親しいこの柏木を公私にわたり事あるごとに招き、厚情を掛けてきた。光源氏は、柏木が女三の宮に宛てた手紙を発見して、密通の事実を知る。次世代を担うはずであった柏木は、密通後、長年崇敬し続けた光源氏への裏切り

キーワード：柏木事件、「帝の御妻」を過つ記述、過去の密事、罪の意識、光源氏の冷徹な態度

\*令和三年度生 比較社会文化学専攻

について悩み苦しみ、病の床に就いて、やがて命を落とす。女三の宮は、密通発覚後、光源氏との冷たい関係を厭い、出家する。

女三の宮と光源氏の結婚時、宮は十四〜十五歳、光源氏は四十歳、柏木は年立上二十四〜二十五歳。密通発覚時に、光源氏は年立上四十七歳である。

ここでは、妻、女三の宮と柏木の密通を知り、誕生した男児を前に、光源氏はいかに対処し、父帝の妃、藤壺との過去の密通にいかに対峙するかを描くために、作者はどのような操作を施したのか、叙述の方法、表現の特徴について探りたい。

以下、第一節では、本考察の研究的背景を述べる。第二節では、柏木事件によって、光源氏が、自身の過去である藤壺との密事に対峙しなければならなくなる表現の仕組みの存在を、「帝の御妻」を犯す罪に関連する叙述の反復に着目して論ずる。第三節では、密通を知って以降、光源氏が女三の宮に見せる冷徹な態度を語る物語叙述の特徴を考察する。

### 一 本考察の研究的背景

『源氏物語』第二部の物語は、朱雀院の娘女三の宮と光源氏の結婚によって動き出す。一九五〇年代に、女三の宮の夫に光源氏を選んだ朱雀院を錯誤の人と論ずる今井源衛氏<sup>①</sup>と、これを否定する石田穰二氏<sup>②</sup>の論争があった。

秋山虔氏は、両者の議論を受けとめつつ、文体の問題へ論点を転換し、女三の宮の結婚に至る「状況をつくり出す作者が、単に（略）条件をととのえ、登場人物に（略）性格を賦与してつきあわせることによって、それを操作する（略）単純な方法でこれが実現され（略）るのではな」く、「登場人物の言動や心理情動の交渉、相関が、とりもなおさず新しい文学的現実をつむぎ出してゆく」<sup>③</sup>叙述のあり方を明らかにした。

自律する作中人物の言葉の相互交渉を重視する秋山氏の観点は、若菜上巻前半のみならず、『源氏物語』第二部全体の研究の活況を導いた。柏木事件については、伊藤博氏の「第二部の、とくに密通事件後の支配的な人間関係は、各人が情意疎通を欠いて自らの孤独な想念のうちに閉じこもり、錯誤によってのみ「他者」とつながり合う、という孤絶したものになり了せている」<sup>④</sup>との的確な把握が示さ

れる。

ただし、作中世界に対する作者の操作を排し、自律する作中人物の言葉の相互交渉によって物語が成り立つとの理解を教条的にあてはめるのみでは、作品の実態から乖離する。第二部における、別種の叙述の方法、表現の特徴を追究する論考が、第二部終末の幻巻の作中和歌、一つ前の御法巻における語り手の情意について発表されていき<sup>(5)</sup>、そうした研究が第二部全体に及びつつある現状である。本稿の考察も、その延長線上にある。

## 二 「帝の御妻をも過つ」関係語群の表現機構

清水好子氏が「若菜両巻、ことに上巻は光源氏の一生に起こった主たる事件」ということは物語第一部の巻々の内容にあたるのだが、それをほぼ残さず、随所に引き出し、新たな世界がすべて過去と無縁でないことを知らしめようとしている<sup>(6)</sup>。というように、若菜上下巻には、『源氏物語』第一部（桐壺／藤裏葉巻）の物語を想起させる出来事が語られる。その最たる事件が、柏木と女三の宮の密通である。

柏木は、女三の宮が光源氏の妻となつて以降も宮を恋慕し続け、若菜上巻巻末のかいま見を経て、宮の乳母子の小侍従に手引きをさせて、密通が成る。その後、柏木からの手紙をぞんざいに扱う宮の不注意により、柏木と女三の宮の密通は、光源氏の知るところとなった。一方、青年時代の光源氏は、自身の母更衣の逝去後に父桐壺帝の妃となった藤壺を恋慕し、密通を犯した（若紫巻）。その結果誕生した男子は、桐壺帝の皇子として育ち、帝位に就く（潘標巻）。物語の冷泉帝である。その後藤壺は逝去し（薄雲巻）、実父が光源氏と知った冷泉帝は、光源氏を准太上天皇という異例の地位に就けた（藤裏葉巻）。柏木と女三の宮の密通を知った光源氏は、自らが犯した過去の罪に向き合わされることになる。

若菜下巻および柏木巻から、臣下の男と皇妃との密通を意味する語句が繰り返しあらわれる。これを、「語脈」概念の応用として考察したい。語脈とは、「単に同一の語彙が繰り返されるといふのではなく、むしろ語彙を一回一回多様に変容しながら繰り返すことによつて、物語の主題が支えられている」<sup>(7)</sup> ような、語句の反復である。応用というのは、語脈の典型とされる夕顔巻の「あやし」の反復

のようにまったく同一の語が繰り返されるのではなく、ここでは、意味的に類似した語句の反復を取り上げるからである<sup>(8)</sup>。

若菜下巻および柏木巻を範囲とし、〈帝の御妻をも過つ〉を中心にして〈女御〉〈限りなき女〉〈宮仕〉〈内裏わたりなどのみやび〉および〈過つ〉を含む文章を列挙する。〈罪〉に関する語句の箇所も加えたほうが、言葉の脈絡についてより明瞭になるかもしれないが、ここでは〈帝の御妻をも過つ〉を中心とする語群に限定した。

《A》（柏木）「いで、あな聞きにく。あまりこちたくものをこそ言ひなしたまふべけれ。世はいと定めなきものを、女御、后もあるやうありてものしたまふたぐひなくやは。……」（若菜下④二二〇）

《A》は、手引き役をすることになる小侍従に、柏木が語る言葉である。柏木は、この世は無常であるから、帝の妻である皇后や女御でも、何らかの事情があつて、夫の帝以外の男性と通ずる例もあるという。右では略したが、《A》は「まして、その御ありさまよ……」（若菜下④二二〇）と、女三の宮に言及する発言に続く。皇妃さえ他の男と関係を持つのだから、まして皇妃でない女三の宮が無常の世にいれば、夫以外の男と通ずるのも自然なことであると、柏木は主張する。自分は皇妃を犯すのではないと言つたために「女御、后」と言う。この《A》が、後に掲げる光源氏の心中をいう《F》と対応することは、早くから注目されている<sup>(9)</sup>。

《B》「さてもいみじき過ちしつる身かな。世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。女の御ために、はさらにもいはず、わが心地にもいとあるまじきことといふ中にも、むくつ、けくおほゆれば、思ひのままにもえ紛れ歩かず。（若菜下④二二九〜二三〇）

《C》帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにかばかりおほえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しきおほゆまじ。しかいぢるき罪には当たらずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおほゆ。（若菜下④二三〇）

《D》限りなき女と聞こゆれど、すこし世づきたる心ばへまじり、上はゆゑあり、児めかしきにも従はぬ下の心添ひたるこそ、とあることかかることにかうぢなびき、心かはしたるたぐひもありけれ、（若菜下④二三〇）

《B》《C》《D》と続き、密通直後の柏木の心中思惟である。《B》において柏

木は、女三の宮との密通を「いみじき過ち」ととらえる。皇妃との密通ではないが、まったく人道に外れた行動であったと反省する。柏木は、生きて世にあることを「まばゆく」感じ、また「恐ろしくそら恥づかし」と感じている。

《C》は、覚悟の上で「帝の御妻」と通じた男ならば、わが身の破滅も受け入れようが、「この院」光源氏にうとまれることは「いと恐ろしく恥づかし」きことであると、柏木は考える。柏木において、光源氏の妻女三の宮との密通は、公的には皇妃との密通のように罰せられることはないが、皇妃との密通に匹敵する大罪であると認識される<sup>(10)</sup>。

《D》の「限りなき女」について『新全集』頭注は「位高く高貴な女性。后なども含まれよう」と説明する。「限りなき女」は、第一義的には最上流の女性一般をさし、皇妃をも女三の宮をも含み得る表現である。最上流の女性であっても、少しでも男女関係に関心があり、表面的にはしとやかで初心な様子に振る舞っていても、内心はそれに収まらない性格の人ならば、夫以外の男性の求愛に応える可能性があると、柏木は考える。高貴な女性の密通はあり得るのだという思考である。

《E》なほざりのすさびと、はじめより心をとどめぬ人だに、また異さまの心分くらむと思ふは心づきなく思ひ隔てらるるを、まして、これは、さまざまの心分おほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど、それは、また、いふ方異なり、宮仕といひて、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに、おのづからさるべき方につけても心をはしそめ、もの紛れ多かりぬべきわざなり、女御、更衣といへど、とある筋かかる方につけてかたほなる人もあり、心ばせかならず重からぬうちまじりて、思はずなることもあれど、おほろけの定かなる過ち見えぬほどは、さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし。かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、内々の心ざし引く方よりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかることはさらにたぐひあらじ、と爪はじきせられたまふ。(若菜下④二五四～二五五)

《F》帝と聞こゆれど、ただ素直に、公さまの心ばへばかりにて、宮仕のほどもものすさまじきに、心ざし深き私のねぎ言になびき、おのがじしあはれを尽くし、見過ぐしがたきをりの答へをも言ひそめ、自然に心通ひそむらむ仲ら

ひは、同じけしからぬ筋なれど、寄る方ありや、わが身ながらも、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを、といと心づきなけれど、また気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るるにつけて、故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。(若菜下④二五五)

《E》《F》は、密通を知った後の光源氏の心中思惟である。《E》において、光源氏は、愛していない女性であつてさえ、裏切られれば不愉快であるが、柏木と女三の宮の密通は、何とも不敵な考えによる裏切りであると考ええる。「帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど」と、光源氏もまた、皇妃密通が成り立つ条件について思いめぐらし、同じ帝に仕える男女の間において、女性が重々しくない場合に「ものの紛れ」が起こるとする。そのように皇妃密通の可能性を見定めた上で、最愛の紫の上への愛情を抑えてまで大切に扱ってきた女三の宮が自分を裏切れることは、あり得ぬことであると、憤慨する。

《F》は《E》に続く文章である。皇妃の密通に関して、ここでは、帝からの寵愛の薄い皇妃が、愛情深い男の求愛に心を許してしまうことは、まだしも理解できるとした上で、自分の妻である女三の宮が、柏木程度の人物に従うとは想定の外であると、光源氏は不快に思う。光源氏は、皇妃密通の例を想起しつつ、女三の宮は柏木に愛情を抱いて密通に及んだのであると、誤解する。不愉快であるが怒りを表すことは憚られると思ひ乱れる光源氏は、自分自身が「気色に出」ださないことから連想し、父桐壺院も今の自分と同様に密通の事実を知りながら、知らないふりをしていたのであるうかと思ひ至り、自身と藤壺の過去の密通について、「その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」と、認識を新たにす。《物語中に、桐壺院が光源氏と藤壺の密通を知っていたか否かは語られない。》ここにおいて、光源氏は「近き例」、最近の身近な例、つまり、自身と藤壺の密通に思い至り、その罪の深さを思い知るのである。

《F》について、秋山虔氏の的確な解釈がある<sup>(11)</sup>。秋山氏は、柏木と女三の宮の密会を、源氏は「許しがたい事態として受けとめるほかなかつた」が、その忿りは「かつての藤壺との密事に対する故桐壺院の心懐への付度」へと転じ、結局は自身も「恋の山路はえもどくまじき御心まじりける」と結着していく心の動き

に着目した。源氏も桐壺院と同じく「知らず顔」をつくるのであるが、それは、「柏木を否定すること即わが存在の否定」であり、「わが存在の根基の秘められた暗部の恐るべき明確な投影として柏木を見る」と解釈する。

また、呉羽長氏の「帝の寵愛する后・藤壺を犯したことへの罪の恐れに、桐壺帝がこの密通を何もかも承知の上でいたかもしれないという不安が加わることに、恐怖は肥大化していく<sup>12)</sup>との指摘も注意される。

《G》さてもおほけなき心ありて、さるまじき過ち<sup>あやま</sup>を引き出でて、人の御名をも立て、身をもかへり見ぬたぐひ、昔の世にもなくやはありけると思ひなほすに、なほけはひわづらはしう、かの御心にかかる咎<sup>よが</sup>を知られたてまつりて、世にながらへむこともいとまばゆくおほゆるは、げにことなる御光<sup>ひかり</sup>なるべし。  
(柏木④二九四)

《G》は、密通露顕を知った後に、柏木が小侍従に語る言葉である。不遜な考えからあつてはならない不義密通を起こし、相手の女性に汚名を被らせた男の「昔の世」の例はあると思つてみても、それでもやはり光源氏に関することは格別であり、光源氏に密通を知られた以上、もはや生きていられないと、柏木は言う。物語の文章は、ここで「まばゆし」の語を《B》と照応させ、光源氏の「光」と結びつける。

室田知香氏が「帝の御妻をも過つたぐひ」の像と、女三宮を恋慕する柏木の像とは、ほんやりと重なるものではありながら、表現として、周辺の論理をも辿りつつ眺めたときには、(略)どこかしらなずらえとしては不整形なものを抱えている。柏木が作中で同様な意義を担う人物となる可能性を感じさせつつ、また同時に、どこかぶれ、完全には重なりきらないもの、という性質を含んでいる。<sup>13)</sup> というように、柏木は「帝の御妻をも過つたぐひ」自体に完全に当てはまらない。

そうでありながら、〈帝の御妻をも過つ〉の関連語句が反復され続けるのは、《C》にあるように、柏木の場合は「しかいぢるき罪には当たらず」と確認しつつも、柏木事件を通して、正真正銘〈帝の御妻をも過つ〉密通である、藤壺との密通の過去に、光源氏を向き合わせるためであったと解せる。若菜上巻以降の物語の中で起こる新たな事件を通して、光源氏を過去(第一部の物語)に向き合わせる第二部の物語の方法が、語脈に準じた、こうした言葉の連環に支えられているので

ある。

密通によって懐妊した女三の宮が産産し、わが子ならぬ男児(薫)の誕生をわが子の誕生として迎えた光源氏の感慨が次のように語られる。

さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり。この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽<sup>かろ</sup>みなんや、  
(柏木④二九四)

ここでいう「恐ろしと思ひし事」は、藤壺との密通をさす。光源氏は、薫の誕生を、自身が犯した密通の報いと受けとめている。この感慨について、田中隆昭氏は、仏教的な応報観を表に立てながら、その基層に儒教的な応報観があることを指摘した<sup>14)</sup>。また、「恐ろし」「罪」は、物語の鍵語として注目されてきた<sup>15)</sup>。

井内健太氏が論ずるように、藤壺との密通について「いにしへのすきは、思ひやり少なきほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん」(薄雲②四六四)と楽観していた光源氏も「ここに至つて(略)かつての密通に対して、報いを受けるべきものと捉えるようにな」<sup>16)</sup> った。「わが世とともに」とある点については、山本利達氏が言うように、光源氏は「自らの「後の世の罪」を深く考えていないものの、一面では、始終「後の世の罪」を恐れていた<sup>17)</sup>と解するのが妥当であるとと思われる。

〈帝の御妻をも過つ〉をめぐり、何点か補足する。『源氏物語』以前には、『落窪物語』に、交野少将のこととして、恋文を贈ると必ず女性の心をつかめるので「人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身のいたづらに……」(巻一・九三)とある<sup>18)</sup>。「帝の御妻」と「身のいたづら」が結び付く点が注意される。

『源氏物語』第一部では、明石の御方の母尼君の発言の中に、次のようにある。  
母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、「光源氏ハ一引用者注」やむごとなき御妻<sup>みめ</sup>どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び<sup>みかど</sup>帝の御妻<sup>みめ</sup>をさへ過ち<sup>あやま</sup>たまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山がつを心とどめたまひてむや」と言ふ。(須磨②二二〇)

光源氏は「帝の御妻」との密通を犯す人物であるという。ここでいう「帝の御妻」は、朱雀院の実質的な妻であった朧月夜を指す。

石川徹氏は、「帝の御妻をあやまつ物語」としての、光源氏と藤壺の密通は、『伊勢物語』(定家本)第六五段に想を得たと論じた<sup>19)</sup>。今井久代氏は、〈帝の御妻

をも過つ)を、『伊勢物語』ないし(業平)引用の反復と見た場合、「柏木物語に  
おける業平引用には、(1) 柏木など男の作中人物のことばまたは心内語の中で、  
(2) 多くは特定の『伊勢物語』本文を想起させずに、「帝の御妻をも過つ」類例  
[「たぐひ」「ためし」引用者注]として引用される、という特徴がある」<sup>20)</sup>と  
指摘する。また、高橋麻織氏は、史実や歴史物語との関係から「帝の御妻をも過  
つたぐひ」を考察した<sup>21)</sup>。

本節の議論をまとめていきたい。《C》に柏木の意識として「帝の御妻をもと  
り過ちて…」とあり、《E》に光源氏の意識として「帝の御妻をも過つたぐひ、  
昔もありけれど」とあった。ここには、準語脈の二重構造とでも言うべき関係が  
ある。第一の層では《C》《E》ともに一般論である。第二の層においては、(帝  
の御妻をも)過つ人物は、《C》では柏木に不完全に重なり、《E》ではまず同様  
に柏木が重なり、さらに《F》との連携によって、光源氏があてはまることにな  
る。

柏木の意識において、柏木と女三の宮の密通は、公的に罰せられるべき皇妃に  
対する密通でないことを繰り返しつつ、しかし実は光源氏を裏切ることの罪は大  
さいのであると、密通の罪の重大さが形作られる。次いで、柏木と女三の宮との  
密通を知った光源氏の、柏木に対する憎しみの大きさが反転して、光源氏は自身  
の過去の密通の罪の大きさを認識する。そうした反転を、物語の叙述において支  
えるのが、柏木の意識と光源氏の意識とに共通する(帝の御妻をも)過つ関連の  
語群であった。類同の語句を反復しながら、提喩的に対応する人物を転ずるとい  
う叙述の方法である。

以上の検討により、光源氏をして己の罪に対峙させる表現の仕組みの存在を論  
証的に示せたと考える。

### 三 光源氏の弱さをかたどる表現群

光源氏は、自分こそ真に(帝の御妻を過つ)大きな罪を犯したことに思い至り、  
父桐壺院も密通を知りながら知らぬ顔をしていたのかもしれないと想像した。し  
かし、前節《F》末尾に「…御心まじりける」とあったように、光源氏は全面的  
に改心することなく、女三の宮に冷酷な態度を取って出家に追い込み、柏木に皮

肉な言葉を浴びせて病死へ追いやる。

《F》の次の物語叙述は「つれなしづくりたまへど、もの思し乱るるさまのし  
るければ」(若菜下④二五五)と続く。光源氏は苦悩から脱しえなかった。光源  
氏が想念中の父院のように振る舞えなかった理由を考えると、桐壺院が藤壺・光  
源氏に抱いた深い愛情を、光源氏が女三の宮・柏木に対して持たなかったこと、  
また、光源氏自身の老いの僻みが、女三の宮・柏木との相互理解を妨げたことが  
想定できる。本節では、これらの点に関わる物語叙述の特徴を明らかにする。

光源氏が女三の宮に対して深い愛情を持たなかった様相は、女三の宮をめぐる、  
外面と内実の相反を語る叙述の連鎖の中に織り込まれる。外面と内実の相反は、  
紫の上が自身についていう「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎたるよそ  
のおぼえはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや…」(若菜下④  
二〇七)の言葉、あるいは光源氏の明石の御方評「うはべは人になびき、おいら  
かに見えながら、うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなく恥づかしき」(若  
菜下④二一〇)のように、他の人物についても現れるが、女三の宮について特に  
反復される叙述の型である。次の《a》《d》は、若菜上巻から抽出した(若菜  
上④七〇、同八七〜八八にも類似の表現が見られるが、ここでは略した)。

《a》女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、  
よだけく、うるはしきに、みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、  
いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ  
児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり。(略)よそ  
の思ひはいとあらまほしきほどなりかし、と思すに、(若菜上④七三〜七四)

《b》宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふこともえなの  
めならざるは、かたじけなきわざなめりかし。(若菜上④一三二)

《c》いと若くおほどきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にし  
つばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさげざやかにもの深く  
は見えず、女房なども…正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこ  
えたまふにすこしもてつけたまへり。(若菜上④一三三〜一三四)

《d》大將は(略)かかればこの世のおぼえのほどよりは、内々の御心さしぬる  
きやうにはありけれと思ひあはせて、(若菜上④一四三)

《a》は、女三の宮のもとを訪れての光源氏の心中を語る。豪華な調度品に対

して、宮本人ははかなく頼りない。しかし世間的には、自身の妻として理想的に見えるであろうと考える。《b》は、明石の御方が、女三の宮と光源氏の夫婦仲について、すばらしいのは宮に対する表面的な扱いだけであると、思う箇所である。《c》は、光源氏の子息夕霧がとらえた女三の宮の様子である。表面的な華やかさに対して、宮に仕える女房たちは軽薄と感ぜられ、光源氏は宮本人にのみ訓導しているようだと考える。《d》は、蹴鞠の日に女三の宮をかいま見た柏木のそばにいた夕霧が、不用意な宮であるからこそ光源氏の愛情も深まらないのであろうと考える。

若菜下巻でも、女三の宮に関する内外相反の叙述は反復される。

若菜下巻では、冷泉帝から、朱雀院の皇子である今上帝への御代替わりが語られる。「姫宮の御事は、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふ」（若菜下④一六六）と新帝の妹である女三の宮の世評は高まるが、「対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。」（若菜下④一六六）と実際は紫の上のありようには及ばないと記される。そして、朱雀院、今上帝に女三の宮の扱いが疎略であると知られないために、「渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、」（若菜下④一七七）と宮を訪れる回数を増やし、外面を取り繕う光源氏の姿が描かれる。

また、女三の宮にも一度対面したいと願う朱雀院のために、五十の賀宴を催し、その場で、女三の宮に琴を披露することが計画されるが、朱雀院、今上帝の、女三の宮の琴の演奏の巧拙によって光源氏の愛情の度合いを計量しようとする思惑を察した光源氏は、熱心に女三の宮に琴を教授する。女房たちは、女三の宮の琴が上達するのを見て、「げに、かかる御後見なくては、ましていはけなくおはします御ありさま隠れなからまし」（若菜下④一八四―一八五）と光源氏の世話がなかったら宮の幼稚さが世にあらわになったであろうと評価する。これも、外面を保つために奮闘する光源氏と、内実が伴わない女三の宮の実態を浮き彫りにする叙述である。

次に、柏木から見た女三の宮に関する内外相反の叙述を見る。柏木は、宮への手引き役をさせる小侍従に対し、「思へばいとたぐひなくめでたけれど、内々は心やましきことも多かるらむ。」（若菜下④二二〇）と、権勢家光源氏の正妻という体面に対して、紫の上に圧倒されて、女三の宮は内心不満を抱えていることを

知っていると告げる。

柏木にとって、密通の日の女三の宮の印象も外面と実際は違っていたことが語られる。「よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推しはかられたまふ」（若菜下④二二五）とあり、想像していた女三の宮は、威厳ある近寄り難い存在であったが、「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。」（若菜下④二二五―二二六）と実際は、ただなよなよした女性であった。しかし、光源氏には難点とされたこのような宮の様子が、柏木にとってはかわいらしく上品に映り、柏木の恋心は更に掻き立てられていく。

こうした叙述を承けて、同じく若菜下巻において、密通を知った後の光源氏と女三の宮の関係が、次のように語られる。

《e》御祈禱などさまさまにせさせたまふ。おほかたのことはありしに変わらず、なかなかいたはしくやむごとなくもてなしきこゆるさまを増したまふ。け近くうち語らひきこえたまふさまは、いとよなく御心隔たりてかたはらいたければ、人目ばかりをめやすくもてなして、思しのみ乱るるに、（若菜下④二五九―二六〇）

右の《e》は、前節《F》よりも後の箇所である。「おほかたの」「人目ばかり」は、懐妊中の宮を気づかい、以前にも増して丁重に扱うが、「け近くうち語らう光源氏の態度は、宮を拒んでいたという。光源氏は、自身の過去を振りかえりつつ、「恋の山路はえもどくまじき御心」にまで至りながら、結局は、父帝のようには振る舞えず、表面的には大事に扱いながら、内心は幼いばかりの宮に幻滅を覚えていた内外相反の女三の宮への態度に回帰することしかできなかった。しかも、密通後の更なる丁重な扱いに対して、光源氏の隔心は、宮にとっては冷徹なものであった。実は柏木と心を合わせてなどいなくて苦しむ女三の宮をいとおしめない光源氏のあり方を支えるのが、女三の宮をめぐる、内実と外面との齟齬の叙述の反復的持続であると言える。

女三の宮をめぐる、外面と内実の相反は、柏木巻に入っても語られる。

《f》おほかたのけしきも、世になきまでかしづききこえたまへど、大殿の、御心の中に心苦しと思すことありて、いたうもてはやしきこえず、御遊びなどはなかりけり。（柏木④三〇〇）

《g》大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなど、と

りわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」とうつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。(柏木④三〇〇—三〇一)

《f》《g》は、女三の宮の出産後に行われた産養いおよびその後について語る箇所である。光源氏は、表面上は子ども誕生を祝いながら、心中では喜ばない。《g》にあるように、誕生した男児(薫)に対して冷淡な光源氏の態度を見て、女三の宮は出家を決意する。光源氏の冷淡さが老女房たちに知られたことについて、野村精一氏は「遂に、源氏の内心に隠されていた矛盾が、外側に知覚されるに至る。「見奉り給はずなどあれば」すなわち、この一つの事情だけではなかつたようだ。この矛盾の溢出は(略)三宮のもとに、今や到達したのである。女三の宮の出家がそれであった」<sup>(22)</sup> のように「など」によって直接語られていない、光源氏の冷淡な態度の存在が読み取れると解説する。森一郎氏は「源氏の冷たさ、威圧が発心へと宮を追いつめたことは、柏木が源氏の威圧によって死へと自滅したのと同軌であった」と述べる<sup>(23)</sup>。

女三の宮、柏木を容認できない光源氏を語る叙述の特徴として、次に、光源氏が相手を見下すことが、女三の宮に対して、柏木に対しても語られることに注目する。

《h》宮は、何心もなく、まだ大殿籠れり。あないはけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りて、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし、と思す。(若菜下④二五〇—二五一)

《i》大殿は、この文のなほあやしく思さるれば、人見ぬ方にて、うち返しつ見たまふ。(略)年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉、いと見どころありてあはれなれど、いとかくさやかに書くべしや、あたら、人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散ることもこそ思ひしかば、昔、かやうにこまかなるべきをりふしにも、言そぎつつこそ書き紛らはししか、人の深き用意は難きわざなりけ

り、とかの人の心をさへ見おとしたまひつ。(若菜下④二五三)

《h》に「心劣り」、《i》に「見おとし」とある。《h》は、光源氏が、柏木が宮に宛てた手紙を発見して密通を知った直後に、傍らに眠る女三の宮を見て思うことを述べた箇所である。すぐに見つけられる場所に柏木の手紙を置いたままにした女三の宮の不用意さに対して、光源氏はあまりに浅はかであると幻滅する。《i》は、入手した柏木の手紙を読む光源氏の心中を語る。光源氏は、あからさまにそれとわかる書き方の文面を見て、自身の若い頃と比較しながら、柏木の思慮のなさを見くたす。

続いて、光源氏が、自身の老いの僻みにもとづく嫌味な発言を、女三の宮に対しても、柏木に対しても述べることに着目する。

《j》(源氏)「いと幼き御心ばへを見おきたまひて、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと、思ひあはせたまつれば、今より後もよろづになむ。かうまでもいかで聞こえじと思へど、上の、御心に背くと聞こしめすらむことの安からずいぶせきを、ここにだに聞こえ知らせやほとてなむ。至り少なく、ただ人の聞こえなす方にのみ寄るべかめる御心には、ただおろかに浅きとのみ思し、また今は、こよなくさだすぎにたるありさまも、侮らはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも、方々に口惜しくも、うれたくもおぼゆるを、院のおはしまさむほどは、なほ心をさめて、かの思しおきてたるやうありけむ、さだすぎ人も、同じくならずらへきこえて、いたくな軽めたまひそ。(略)院の御世の残り久しくもおはせじ。いとあつしくいととなりまさりたまひて、もの心細げにのみ思したるに、今さらに思はずなる御名漏り聞こえて、御心乱りたまふな。(略)後の世の御道の妨げならむも、罪いと恐ろしからむ」など、まほにそのこととは明かしたまはねど、つくづくと聞こえつづけたまふに、(若菜下④二六九—二七一)

《k》涙のみ落ちつつ、我にもあらず思ひしみておはすれば、我もうち泣きたまひて、(源氏)「人の上にてももどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはることにこそ。いかに、うたての翁やと、むつかしくうるさき御心添ふらむ」と恥ぢたまひつつ、(若菜下④二七一)

《j》《k》は、女三の宮を案じて、朱雀院が寄越した手紙の返事を書くように諭す光源氏の発言である。《j》において、朱雀院はあなた(女三の宮)の幼稚

さを危惧して私（光源氏）に託したので、自分はあなたに嫌われても忠言をしななければならぬのであり、私を父院同様に見なして諫言を受けとめてほしいという中に、光源氏は、自身について「さだすぎにたる」「さだすぎ人」と、繰り返す。自嘲的な言葉でありながら、密通を犯した幼き人女三の宮に対して、皮肉として働く。《k》でも、泣き続ける女三の宮にもらい泣きしつづも、光源氏は「古人のさかしら」「うたての翁や」と畳みかける。《k》に続き、手もふるえて父院への返信を書けない女三の宮に対して、光源氏は「かのこまかなりし返り事は、いとかくしもつづまず、通はしたまふらむかしと思しやるに、いと憎ければ、よろづのあはれもさめぬべけれど」（若菜下④二七一）とあり、女三の宮が柏木と心を合わせて密通に及んだと誤解している光源氏は、妄想から女三の宮・柏木への憎しみを募らせる。石田穰二氏は「宮は年輩の夫たる自分の愛情にあきたらず、柏木と心あはせての密通である」とこの事件を見てゐる。そして柏木と宮の若さに敗れた自分の類齢の意識がほろにがく反芻されてゐる」と<sup>24</sup>と解説する。

次の《1》は、朱雀院五十賀の試楽の催しに、六条院を訪れた柏木に対して、光源氏が言った言葉である。

《1》主の院、「過ぐる齡にそへては、酔泣きこそどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」とてうち見やりたまふに、（若菜下④二八〇）

若い柏木が、老いた自分（光源氏）を嘲笑しているようで恥ずかしいと、光源氏の言う言葉は、密通の発覚したことを知り、光源氏を怖れる柏木にとって打撃となり、その後、柏木は病に伏せてしまう。前節《B》《C》《G》にあつたように、柏木は光源氏を怖れていた。光源氏が、女三の宮と柏木が相思相愛であると誤解していたことと見合うように、柏木は、光源氏の心中を知ることなく、異様なほどに光源氏を恐懼していた。石田穰二氏が言うように、《1》は、語句の意味の次元で柏木を攻撃する発言ではない。「何か一件をほのめかすにも似た源氏の言葉があれば足りたのであり」、柏木「の畏怖の念が生んだ幻影にもひとしい源氏の眼光が、現実の源氏の眼光と重なる事によつて（略）柏木に決定的な時が訪れた」のである<sup>25</sup>。

## おわりに

以上、柏木事件をめぐる物語の、叙述方法、表現の特徴を検討した。

第二節では、「語脈」概念の応用として、《帝の御妻》をも過つ関連の語群に着目した。この類同的語句の反復により、柏木は、自分と女三の宮の密通は、公的に罰せられるべき皇妃に対する密通ではないことを繰り返しつつ、光源氏を裏切る罪の大きさを認識する。柏木と女三の宮の密通を知った光源氏は、自身の過去の密通の罪の深さを認識することになる。《帝の御妻》をも過つ関連の語群は、光源氏が、己の過去の罪の深さに対峙するように導くために仕組まれた表現であつたと論証した。

第三節では、低迷し、女三の宮、柏木を不幸に追いやる光源氏の人物像をかたどる上で、女三の宮に関する外面と内実との相反を語る反復の型、光源氏が宮と柏木をともに見くだし、また兩人に対して自身の老いを強調した皮肉を述べるという対称の型が、機能していることを指摘した。

柏木事件を通して、光源氏は父桐壺帝の思いに触れ、過去の自身の密通の罪の深さに畏れ慄くが、自身は、桐壺帝のように寛容に振る舞えず、女三の宮に冷徹な態度を取る。それには、女三の宮に対する愛情の問題が絡んでいる。そして、密通について実態を見ようとせず、意識を内へ内へと向かわせたことによる誤解から、嫉妬、老いに懊悩する光源氏の姿を映し出している。

## 〔註〕

- (1) 今井源衛「女三宮の降嫁」『文学』第三卷第六号、一九五五・六、『今井源衛著作集第二卷』笠間書院、二〇〇四・二、所収。同「源氏物語の歴史」『国文学解釈と鑑賞』第三二卷第一〇号、一九五七・二〇、『今井源衛著作集第六卷』笠間書院、二〇一八・一〇、所収。
- (2) 石田穰二「女三の宮と柏木について」『東京大学国語国文学会編「国語と国文学」第二八卷第一二号、一九五二・一二。同「柏木の死について」『同前第三〇卷第九号、一九五三・九。同「若菜の巻について」『同前第三三卷第一二号、一九五五・二。いずれも石田穰二「源氏物語論集」(桜楓社、一九七二・一一、所収)。
- (3) 秋山虔「若菜」巻の始発をめぐって『源氏物語の世界 その方法と達成』(東京大学出版会、一九六四・二〇。一七九頁。初出一九五九・一一)。

- (4) 伊藤博「柏木の造型をめぐって」『源氏物語の原点』(明治書院、一九八〇・一一。二六九頁。初出一九六七・二〇)。
- (5) 小町谷照彦「幻」の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ―『源氏物語の歌ことば表現』(東京大学出版会、一九八四・八。初出一九六五・六)。池田和臣「紫上終焉の方法―御法巻の表現構造―」『源氏物語表現構造と水脈』(武蔵野書院、二〇〇一・四。初出一九七五・六)。
- (6) 清水好子「源氏物語の主題と方法―若菜上・下巻について―」『清水好子論文集 第一巻 源氏物語の作風』(武蔵野書院、二〇一四・八。三〇五頁。初出一九六九・六)。
- (7) 鈴木日出男「源氏物語の文章表現」(至文堂、一九九七・五)。「第8章 文脈の照応」一七八頁。
- (8) 本稿が取り上げる語句とは異なるが、柏木物語における、類似場面や同一語句の反復を扱った論考に、池田節子「場面と物語の反復―柏木物語の同語反復を中心に―」『源氏物語表現論』(風間書房、二〇〇〇・二二。初出一九九八・二)がある。
- (9) 野村精一「若菜巻試論―人間関係の悲劇的構造について―」『源氏物語の創造』(桜楓社、一九六九・九。初出一九六〇・三。一九二―一九三頁)。
- (10) 《C》にある「身のいたづら」については、高田祐彦「身のはての想像力―柏木の魂と死―」『源氏物語の文学史』(東京大学出版会、二〇〇三・九。初出一九九四・五)を参照されたい。
- (11) 秋山虔「柏木の生と死」『源氏物語の論』(笠間書院、二〇一・一八。一九六―一九七頁。初出一九八二・九)。
- (12) 呉羽長「『源氏物語』における柏木の造型の特質と構想的意義について―「おほけなし」の語に着目して」(『富山大学人文学部紀要』第六八号、富山大学、二〇一八・二。三六七頁)。
- (13) 室田知香「柏木物語の引用的表現とその歪み―帝の御妻をも過つたぐひの像と柏木―」(『日本文学』第五六巻第一二号、日本文学協会、二〇〇七・二。一三―一四頁)。
- (14) 田中隆昭「密通事件の応報について―「史記」の因果観からの照射―」『源氏物語 歴史と虚構』(勉誠社、一九九三・六。初出一九八八・二)。
- (15) 吉村研一「罪」と「恥」に関わる言葉について『源氏物語』を演出する言葉』(勉誠出版、二〇一八・二)などを参照されたい。
- (16) 井内健太「『源氏物語』柏木の密通事件における意識」(『東京大学国文学論集』第一三集、二〇一三・三。三二頁)。
- (17) 山本利達「源氏物語の密通と罪」(『奈良大学紀要』第二九巻、奈良大学、二〇〇一・三。二八頁)。
- (18) 『落窪物語』の引用は、『新編日本古典文学全集17 落窪物語 堤中納言物語』(小学館、二〇〇〇・九)による。
- (19) 石川徹「伊勢物語の発展としての源氏物語の着想―輝く日の宮と光る君と―」『古代小説史稿 源氏物語と其前後 増訂復刻版』(パルトス社、一九九六・五。三七四―三七五頁。初出

一九四九・七―一〇)。

- (20) 今井久代「柏木物語の「女」と男たち―業平幻想の解体と柏木の死―」『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』(風間書房、二〇〇一・六。三四〇頁。初出一九九五・二)。
- (21) 高橋麻織「帝の御妻をも過つたぐひ―后妃密通という話型―」『源氏物語の政治学 史実・准拠・歴史物語』(笠間書院、二〇一六・二。初出二〇二二・三)。
- (22) 野村精一「源氏物語の文体批評―第二部の問題―」『源氏物語文体論序説』(有精堂、一九七〇・四。二〇六頁。初出一九六三・五)。
- (23) 森一郎「源氏物語の主題形成の方法―第二部を中心に―」『源氏物語の主題と方法』(桜楓社、一九七九・五。二四二―二四三頁。初出一九七一・六)。
- (24) 石田稜二「柏木の死について」『源氏物語論集』(桜楓社、一九七一・一。三四頁。初出一九五三・九)。
- (25) 石田稜二「柏木の死について」『源氏物語論集』(桜楓社、一九七一・一。二八頁、三八頁。初出一九五三・九)。また、高橋亨「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」『源氏物語の対位法』(東京大学出版会、一九八二・五。一九七三・一二)も参照されたい。

\*『源氏物語』の引用は、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集20―25 源氏物語』①～⑥(小学館、一九九四・三―一九九八・四)により、巻名・分冊番号・ページ番号を付す。『新全集』と略称する。

# The Tale of Genji: A Study of Hikaru Genji based on the Kashiwagi Incident

SEKI Kaeko

## Abstract

One of the classics of Japanese literature, Tale of Genji's protagonist, Hikaru Genji, at the age of 47, learns that his wife's adultery with a young man named Kashiwagi. The term "Kashiwagi Incident" is used to refer to this instance of adultery.

This paper focuses on the repeated mentions of the crime of violating "the wife of an emperor," and concludes that the story's author does so for the following purposes: to express Kashiwagi's way of dealing with his feelings of guilt for betraying Hikaru Genji by assuring himself that adultery was not a major crime because he did not violate the wife of an emperor and to make Hikaru Genji face his own major transgression—his past adultery with Fujitsubo, who was the wife of an emperor.

Hikaru Genji takes a cold attitude toward his wife after finding about her adultery, while pretending that nothing is wrong. The paper clarifies the characteristics of the story's narrative by focusing on the contradiction between his behaviors and emotions, such as his lack of respect toward his wife, jealousy caused by misunderstanding, and envy in old age.

Key word : Kashiwagi's incident, Descriptions about adultery of emperors' wives, The past adultery,  
A sense of guilt, Hikaru Genji's cold-hearted attitude